

16歳命の遺言

両親受け継ぎ朗読会

骨肉腫を患い、2007年に16歳で他界した少女の思いを語り継ぐ朗読会「たった一つの命だから」が、今も全国各地で開かれている。寄せられたメッセージは5000通を超えた。生きる望みを捨てず、病に立ち向かった一人娘の願いをかなえたいと、両親はこれからも命の尊さを訴え続ける。

*25日は江東で

「自分が弱いと感じるのは一人です生きていこうとするからだ 生かされている それを忘れるな」豊島区の区立南池袋小学校で先月17日に開かれた朗読会。スクリーンには、西



抗がん剤治療を終え、退院の際に友人からもらった千羽鶴を持つ誉佳さん（2005年12月、良秀さん提供）

尾誉佳さん（享年16歳）が闘病中に残した言葉が映し出された。武蔵野市に住む父、良秀さん（60）がパソコンを操作した。誉佳さんの半生をまとめた動画や誉佳さんの詩、イラスト作品なども紹介され、約400人の児童は真剣な表情で見入り、保護者は涙を拭いた。

2年生の利川未来さん（8）は、誉佳さんが病床で虹の絵を描いていたことに触れ、「亡くなる直前にも人の心と心がつながるように願っていて、すごいと思った。私もたった一つの命を大切に、友達と仲良くしていきたい」と話した。

誉佳さんは、中学1年だった05年3月に痛みを訴えた。骨肉腫と診断され、9月に利き腕の右腕を切断した。翌06年の正月、不自由な左手で「たった一つの命だから」と書いた年賀状を友人らに送った。

「生きたい」という願いが込められた年賀状がメディアで報じられると、この言葉に続くメッセージを集

めて朗読する活動が自然と始まった。いじめを受けていた少女から「たった一つの命だから、死のうと思っていたけどやめました」との手紙が届き、誉佳さんは「自分でも誰かの役に立てた」と、泣きながら喜んだという。

朗読会でパソコンを操作する良秀さん（左）（豊島区の南池袋小で



あすの	10月19日
	（日曜日）
通日	292
旧9月26日	<仏滅>
月齢	24.9
（正午）	
日出	5:50
日入	17:01
月出	1:19
月入	14:23
—東京標準—	
満潮	{ 1:47
	{ 14:38
干潮	{ 7:52
	{ 20:49
（若潮）	

（武蔵野市）を設立した。「天国からよばれたとしても運動を応援し続ける」という誉佳さんの言葉を思い出したからだ。

国内で開かれた朗読会は65回に上り、計約1万3000人が参加した。11、12年には、良秀さんらの友人がいるスイスやハワイ、オーストラリアなど8か国のホテルや教会などで開催した。届いたメッセージは5000通超。ある女子中学生は「誰もがたった一つの命だからこそ、愛されるべきなのではと思った」と感想を寄せ、女子高生は「どうせ無理だと自分に言い聞かせてしまうのはやめよう。あきらめずに、誰になんて言われようと頑張ってみようと思う。たった一つの命だから」と決意を書いた。

次の朗読会は今年25日、江東区の小学校で開かれる。良秀さんは「生きたくても生きられなかった誉佳の遺志を受け継ぎ、一つでも多くの学校で朗読していきたい」と話している。

と保護者の住所、氏名（ふりがな）、学校と学年、電話番号、ボウリング経験の有無を記入し、「親子ボウリング教室」と書いて、文京区

スポーツ振興係（〒112-8555 文京区春日1の16の21）へ送る。締め切りは今年22日（必着）。応募者多数の場合は抽選。

22日の計3回。定員14組28人。参加費は大人3000円、小学生1500円（シューズレンタル料含む）。申し込みは、往復はがきに児童